

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K00753

研究課題名(和文) ころとからだの関係から考えるパーソナルファッションとその教材化に関する研究

研究課題名(英文) Study on personal fashion and its teaching material considering from relationship between mind and body

研究代表者

村上 かわり (Murakami, Kaori)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80229955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では着用者の個々の体形、嗜好に適した心身ともに心地よい衣服であるパーソナルファッションに求められる要因について追究した。着心地の良い衣服に対する意識の調査に加え、実験的な検証としてタイトスカートを用いて、オーダーメイド仕様の注文服と既製服の比較を筋電図と脳波測定により行った。また着衣シルエットに影響を及ぼす下着であるブラジャーについては、専門家によるフィッティングの有無との差異を検証した。その結果、着装感と見た目の評価ともに、体形に適合した衣服が良かった。また衣服の柄は、対人の年代層の評価を想定して柄を選択することによって、好印象を有するパーソナルファッションになることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated the factors required for personal fashion, which is a comfortable clothing that is appropriate for both the wearer's body shape and preference. In addition to investigating consciousness of clothing comfortable to wear, comparison between ordered and ready-made clothing was performed by EMG and electroencephalogram using tight skirt as experimental verification. In addition, for underwear brassiere that influences clothes silhouette, we examined the difference with the presence or absence of fitting by experts. As a result, clothing adapted to the body shape was good both for the sense of wearing and the appearance evaluation. The pattern of clothes was also found to be a personal fashion with a good impression by selecting a pattern assuming the interpersonal age groups.

研究分野：衣生活学

キーワード：パーソナルファッション 着心地 ころ からだ タイトスカート 柄 教材

## 1. 研究開始当初の背景

ユニバーサルデザインは、年齢、性別、障害の有無にかかわらず、出来るだけすべての人が利用できる製品を創造、デザインしようという概念である。その概念は、超高齢社会を迎えた現在、高齢者だけでなく加齢により身体機能が変化した人々が快適にファッションを楽しめる環境を目指したユニバーサルファッションの思想へと発展した。誰もが快適に着用できる衣服に求められることは、着脱しやすいだけでなく、動きやすいという機能性である。すなわち日常生活における様々な動きに対しても、着衣による拘束がなく、疲労を伴わないことが望ましい。

衣服の着脱の容易さ、動きやすさなどの動作適応性に関する従来の研究では、その客観的指標を得る方法として衣服圧が用いられてきた。しかし近年、動作中の生体信号の記録として、筋電図による研究が医学やスポーツ科学の分野で行われており、石垣ら(2007)の研究によって、筋電図を用いることにより、衣服による動作拘束を定量的に評価できることが明らかとなっている。しかし衣服の着脱行動において支障が生じることが多い、高齢者の筋負担については個人差が大きく、また体形、姿勢も様々であるため、筋負担と体形についての関係性を明らかにしたうえでなければ、機能的な衣服の設計をすることが難しいと考えられる。

このような背景からその動作拘束の指標となる筋負担を計測し、体形と動きやすさの関係性を考慮した機能性の高い衣服設計を行えるようにすることを目的とした研究を着想するに至った。

まず体形と、筋負担のかかる部位や負担の大きさとの関係性を明らかにしたいと考え、平成 23 ~25 年度の科学研究費補助金研究においては、日常生活動作を行ったときの筋負担と着心地の関係について、実験による検証を行った。その結果、体形の違いによる影響は若干みられるが、拘束感のある部位の筋負担が大きいとは限らないことが明らかとなった。そのため、着心地に大きな影響を与えると考えられる衣服の拘束感をとらえるためには、筋負担だけでなく、脳波など他の生体負担変化についても複合的にとらえ、着心地に影響を与える要因の相関性ならびに体形との関係性を、さらに追究する必要性を感じた。また拘束性のある衣服の着衣による不快感やストレスなど、こころの状態の動向も着用感を変化させる。これらのことから、人が日常生活動作により姿勢を変化させた際の生体負担を、動的観察により時系列変化でとらえ、またその際のこころの状態とのその関係性から着心地を高めるパーソナルファッションに必要な指標を明らかにしたいと考えた。

さらに本実験で得られた知見を、衣服の機能を理解し、着心地のよい衣服選択力の習得を支援するための教材として活用できるよ

うにすることは、衣生活教育において有用であると考え、教材化に対する示唆を得ることを企画した。

## 2. 研究の目的

本研究は、衣服の着用感(こころ)と生体負担(からだ)との関係から、個々に対応したパーソナルファッションについて追究することを目的とした総合的研究である。その目的を達成するために、以下のいくつかの研究を複合的に実施した。

(1)生理的な感覚に基づいた着心地を向上するだけに限らず、自己を魅力的に見せることもパーソナルファッションにおける着用感には求められる。衣服の社会的機能として個性の表現があげられるが、自分が表現したい個性を的確に表現できる衣服を着装してこそ、こころを満足にできる衣服になると考えられる。

衣服は、「色・柄」、「素材及びその質感」、「デザイン(シルエットや衿、袖などの細かなディテールも含む)」の3つの要素で構成される。なかでも「色・柄」は、衣服の印象を決定する上で重要な役割を担っており、個性の表現に欠かせない要素である。しかしそれらの要素を用いた演出の捉え方は、年齢によっても変化する。そこで、若年、中年、高年の女性を対象に、柄のある衣服(以下、柄衣服と称する)の着装実態と各柄に対するイメージを若年から見た中年、中年から見た若年のように、異なる年代間において双方向から調査し、自己の着装イメージと他の年代の女性の着装イメージの差異や共通点を分析した。年代間によって生ずる差異や共通点を参考にしながら、他の年代にも好印象を得られる装いをする事によって、各々の世代が自己表出できる柄衣服を選択できる。このように生活環境や対人に適合し、かつ好印象を与えるパーソナルファッションに関する情報を得ることを目的とした。

(2)現代の衣生活は既製服が中心となり、人々はとりあえず自分の体形にもっとも近いサイズの衣服を選択し、着装している。しかしその選択基準となる値は、バストや背丈、ウエストなど、長さのデータであり、人体の複雑な凹凸に適合させたものではない。そこで個々の体形に適合したオーダーメイド仕様の注文服と、既製のスーツのタイトスカートとの違いを身体的負担を含む着用感から検討した。

なおこれまでの研究では、動的拘束性が強く、主観的評価としての着用感評価が良好ではない部位においても、その筋負担が大きいとは限らず、着心地の良さと筋負担に明確な相関関係は見られなかった。このことから、着用感評価の客観的指標として、筋負担以外で、より適正な生体信号について検討した結果、着用感評価を主観的な官能評価のみでなく、着衣時の生体信号の数値データとしてと

らえることにより、着心地の良さを客観的評価として捉えることとした。これらの結果から、着心地の良い衣服に対する示唆を得ることを目的とする研究を行った。

(3)さらに、特に体形との適合性が、着心地に最も影響を与える下着であるブラジャーに着目した研究を行った。体形や嗜好との適合性を高めるため、下着専門店等には下着の専門知識を有する店員が配置され、フィッティングといわれるアドバイスによってブラジャーを購入することが推奨されている。そこで当該研究では、フィッティングによるブラジャーの購入について、購入時の意識と実態の調査をふまえ、その効果を検証し、より満足できるブラジャーを選ぶための示唆を得ることを目的とした。

以上の結果から、心身ともに心地よいパーソナルファッションについて考察することを旨とした。また衣服の機能、衣服と人間との関係を理解するための衣生活教育教材として、これらの研究結果から得られた知見がどのように有用であるかについても検討を行い、学校教育における教材化への示唆を得ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 柄衣服の着装意識と実態およびその着装イメージについて

20代、40～50代、60～70代の女性を対象に、柄のある衣服の着装実態と各柄に対するイメージを、若年から見た中年、中年から見た若年のように、異なる年代間において双方向から調査し、自己の着装イメージと他の年代の女性の着装イメージの差異や共通点について分析した。異なる年代の衣生活について検討するため、女子大学生を中心とした20代53名、その母親世代である40～50代31名、祖母世代の60～70代の30名の114名を調査対象とした。調査は2015年7月から12月にかけて実施した。調査に用いた柄はギンガムチェック、花柄、ドット柄、ストライプ柄、ボーダー柄、ヒョウ柄、迷彩柄の7種であった。着装イメージの評価については、株式会社テクノア社製のi-D FitとBody Order Toolを用いて、20代、40～50代、60～70代の女性がそれぞれの柄の衣服を着装しているシミュレーション画像を作成し、それらを用いて印象を評価する実験を行った。この実験は、各世代4名の計12名を対象とし、質問紙調査と同様の7柄を使用した。

(2) 既製服と注文服の違いによるタイトスカートの適合性について

既製のスカートと、個人の体形に応じたオーダーメイド仕様のスカートを着用した場合の着心地の差異について、意識と実態調査及び実験により検証した。調査では身体にフィットした着衣としてタイトスカートを着用し、タイトスカートを購入するときの身体寸

法情報の把握状況、購入時の意識などを、女子大学生95名を対象に調査した。実験では、研究室で所有している既製のタイトスカートと同じMサイズの衣服を日常生活で着用している被験者(健康な女子大学生2名、ともに22歳)を選定し、同素材、同デザインの注文服(タイトスカート)を、業者による縫製によって調達した。注文服の縫製工程では、被験者に適応するよう、適宜補正を行うよう依頼した。このように縫製した注文服を用いて、日常生活動作をおこなったときの筋電図をPolymate AP216(TEAC株式会社製)を用いて計測し、既製服着衣時との筋負担の相違点を検証した。また着用時の身体への負担として、リラクセス感を把握するため、脳波計MUSE BRAIN SYSTEM(株式会社デジタルメディック)を用いて脳波を測定した。また着用時の審美性が着用感に与える影響を検証するため、既製服着衣時と注文服着衣時の立位ならびに座位の正面、側面、背面の写真を用いて印象評価を行った。印象評価は自己評価だけでなく、被験者以外の評価者を3名選定し、フィット性、審美性についての項目について5段階で評価した。調査ならびに筋電図、脳波測定を用いた実験は、2016年7月から2017年2月にかけて実施した。

(3) 下着の適合性が着心地の総合的評価に与える影響について

女子大学生107名を対象に、下着購入に対する意識とフィッティングの実態について調査を行った。

またフィッティングにより選択したブラジャーならびにこれまで着装していたブラジャーでは着心地がどのように変化するか、着装感と着衣バストシルエットに対する評価を取り入れた実験的検証を、5名の被験者を対象に行った。着衣バストシルエットの評価は、ブラジャーの上からフィットした衣服を着装したときの見た目について、写真による自己評価と他者評価とした。さらに着衣バストシルエットの変化について、バストポイント間とウエストラインからバストポイントまでの計測値を分析した。調査ならびに実験的検証は、2017年7月から2018年1月にかけて実施した。

### 4. 研究成果

(1) 柄衣服の着装意識と実態およびその着装イメージについて

質問紙調査の結果から、各年代のいずれにおいても、被服を購入する際「柄」を意識して購入する人が多く、年代が上がるにつれてその意識が低くなることが明らかとなった。また、60～70代の高年層は「他人からの評価」を意識しておらず、20代の若年層は「年齢」を意識していないことがわかった。各柄のイメージにおいては、20代は柄に対して肯定的なイメージを持っており、所持率も高いことがわかった。20代、40～50代で最も所持率

の高い柄はボーダー柄であり、所持率はともに80%以上であった。一方60~70代のボーダー柄の所持率は36.0%であり、年代による差異が認められた。花柄は3世代ともに高い所持率であった。

着装シミュレーション画像による印象評価実験の結果から、好印象を得られる柄は年代によって違いがあることが明らかになった。ギンガムチェック柄、花柄は3世代の着装に対して「好印象」ととらえられた。ドット柄、ストライプ柄、ボーダー柄は、20代、40~50代の着装に対しては「好印象」ととらえられるが、60~70代の着装に対しては「低印象」ととらえられた。ヒョウ柄、迷彩柄は3世代ともに「低印象」ととらえられ、柄ごとに差異が認められた。年代ごとの印象評価に着目すると、20代の迷彩柄の着装に対して、20代からは「好印象」と評価されるが、40~50代、60~70代からは「低印象」と評価された。40~50代のボーダー柄の着装と、60~70代のギンガムチェック柄の着装に対しても年代ごとの評価に差異が認められ、相手の年代を考慮した柄衣服選択が重要であることが明らかとなった。すなわちパーソナルファッションとしての衣服選択においては、自己だけでなく他者の存在も認識する意識が必要であることが示唆された。

#### (2) 既製服と注文服の違いによるタイトスカートの適合性について

質問紙調査の結果から、ウエストとヒップ両方の正確なサイズを把握していた人は95名のうち10名のみであった。ウエストまたはヒップの正確なサイズを把握していない人の多くは、数着の試着を行い、最も合っていると感じたサイズのタイトスカートを購入していたことが明らかとなった。また、購入したタイトスカートに対して、着心地、ゆとり、フィット性などで不満を持っている人が多くいることも明らかとなった。

生体信号記録実験の結果、筋電図において、動作や既製服と注文服の違いによらず、被験者によって筋活動が大きくなる筋肉の部位には特徴があることが明らかになった。また歩行するときと自転車を運転するとき以外の日常生活動作時において既製服よりも注文服着装時の筋活動が大きくなることも明らかとなった。しかし官能評価において、椅子への着席と起立、歩行、階段昇降、しゃがむ、自転車を運転する動作時では注文服着装時の方が既製服着装時よりも動きやすかったと回答した。印象評価において、注文服の方が既製服よりも支持された項目が多く、タイトスカート着装時の見た目の印象については、被験者本人も他者評価者もともに、注文服の方が既製服よりも評価が高いことが明らかとなった。

また脳波測定の結果、注文服着用時の方が既製服着用時よりもアルファ波出現量が多く、リラクセス効果が高かった。

スーツのタイトスカートを購入する際には、スカート丈が消費者の身体に適合したものを選択するか、もしくは適合するように補正することで、着心地の良いタイトスカートの着装ができることが明らかとなった。

#### (3) 下着の適合性が着心地の総合的評価に与える影響について

ブラジャー購入時のフィッティングは65%の人が経験していたが、毎回フィッティングする人は24%止まりであることが明らかとなった。またフィッティング経験の有無によって、身体のだの部分がフィットしたブラジャーが適切かといった体形とのフィット性に対する情報が、どの程度フィッティングによって得られると感じているか、フィッティングに対する意識に違いが見られた。またフィッティング経験者の方が、自分の身体に合うことなどの項目を強く意識して購入することがわかった。ブラジャーの選択時にはフィッティングの利用経験の有無が関係していることが分かった。また通信販売でのブラジャー購入について調査した結果、通信販売での購入に対する抵抗感は、通信販売の利用経験がないほど高く、通信販売で過去にブラジャーを購入した際の失敗経験も抵抗感を高める原因になることが明らかとなった。

着装感も写真による評価も、フィッティングにより購入したブラジャー着装時の方が高いことがわかった。しかし、1ヶ月後にはフィッティングで得た方法により適切に着装できていた被験者はいなかったことから、定期的にフィッティングを行い、適切な着装方法や着装状態を確認する必要があることがわかった。以上の結果より、体形との高い適合性が求められるブラジャーにおいては、フィッティングを行い各々に適したものを選択することで、着装感、自己ならびに他者による評価も高い状態で着装できることが明らかとなった。またフィッティングを経験した被験者は衣服選択における体形との適合性に対する意識が高まったことから、着装感を体感させる機会は教育効果の向上に有用であることが示唆された。

#### (4) 教材化への指針

小学校、中学校、高等学校の家庭科においては、衣服の機能について学習するが、衣服と人間との関係を理解するための衣生活教育教材として、本研究のデータがどのように活用できるかに関して、それぞれの教科書の衣生活に関わる内容について考察を行った。

高校の「家庭基礎」においては、衣服のもつ自己表現の働きや社会通念を意識した被服選択の必要性を学習する機会があるが、その内容は被服の働きの概要を示したものにすぎない。個性の表現に有効な柄の印象効果や、実際の生活場面と人(Person)に対する認識を採り入れたTPPOを設定した具体的な

衣服選択の基準を考えさせる機会は少ない。日常生活において、自己の判断で衣服選択をする機会が増加する大学生を目前とした高校生に対し、TPPOにおける衣服の印象効果の重要性と、成人式や冠婚葬祭、相手の年齢と自身の年齢を考慮した衣服選択の重要性を認識させることが必要であると考えられる。本研究で用いた着装シミュレーション画像は、異年代の人からの印象も考慮した衣服選択能力を養う教材として活用できることが示唆された。

体形に適合した注文服の着心地については、自己ならびに他者ともに高い評価が得られたことから、体形に適合した衣服を選択することの重要性を体感させることができると考えられる。特に既製服との違いが顕著であったスカート丈を補正するだけでも、視覚的な評価が変化することは、消費者として衣服を選択、購入する際の視点として重要である。一連の実験はこれらの内容を採り入れた教育への指針となったと考えられる。

またフィッティング経験の効果の一つとして、ブラジャーの着装方法や選び方に関する教育が必要であると考え人が増加した。この結果は、被験者自身が適切なブラジャーの情報を得たことで、正しい知識や着装方法を知ることの重要性を再認識したことを示している。初めてブラジャーを着装する児童や生徒にとって、身体に合っていないブラジャーを強制的に着装させられ、圧迫感や不快感、不自由さを感じながら生活することは、肉体的・精神的にも苦痛である。加えて、そのことによって自分が大人の身体に変化していることに対し否定的な感情を抱くことや、自分の身体に対して過度にコンプレックスを抱く原因に繋がる。ブラジャーの着装教育を行うことは、自分の身体の変化に気付かせ、子どもたちがそれを受け入れていく過程に役立つと考えられ、活動的に日常生活を送ることを可能にするだけでなく、性犯罪の予防という観点からも重要である。身体の発達の仕方は様々であり、本研究における調査でも初めてのブラジャー着装開始時期が小学校1,2年生から高校生まで広く分布していたことから、学校教育の中で一律に取り扱うことは難しいことが考えられる。しかし、身体に適したブラジャーを着装することが、こころもからだも心地よい衣服の基盤となる。このことを成長期の頃から認識し、フィッティングの重要性を理解させるための教育は重要である。

#### (5) 今後の課題と展望

近年IoT等のデジタル技術を活用することにより、個々の消費者の型・柄・色・サイズ等の好みやデータに個別に対応しながら大量生産を図るマスカスタマイゼーションへの取り組みが活性化している。

この取り組みは服のフィット感や似合い度など、自分にあった商品を求める消費者に

対して有効である。加えて、受注生産により在庫ロスを最小化できるなど、これからの衣服生産を根本的に変革する可能性があるものとして、繊維業界において積極的な取組が始まっている。

服のフィット感や似合い度については、本研究においても、衣服選択の重要な要素であることが示唆されている。

経済産業省製造産業局生活製品課による「繊維産業の現状と課題(2017年3月)」によると、株式会社サーレンは、Viscotecsというソリューションを提供しているが、これは等身大モニターとタブレット端末を用いて、バーチャルに試着しながら洋服の型、柄、色を消費者が自分の好みに合わせて、自分に合った一枚を発注することができる仕組みである。その情報は店舗の端末から生産工場に直結することにより、すぐに発注でき、3週間ほどで消費者に届くサービスである。

また2017年発表されたスタートトゥデイが提供するZozosuitは、個人の身体の寸法を瞬時に採寸することのできる伸縮センサー内蔵の採寸ボディースーツである。上下セットで着用し、スマートフォンをかざすことで、採寸データから注文が可能となる。

このように個々の好みやデータに対応したパーソナルファッションは、日進月歩の情報機器の活用によって、着々と実現のための環境整備が行われている。本研究によって、パーソナルファッションの評価を高めるためには、他者による評価も必要であることが明らかとなった。このことからパーソナルファッションに対して、年代別、性別など状況に応じたアドバイス機能が連動し、個々の着用者の年齢、体形などのパーソナリティを生かした衣服選択ができることが望ましい。したがって、着用者が表出したいイメージの衣服を着用者自身が想像しながら的確に選択するためには、生産者と着用者とのコミュニケーションが、さらに円滑に行われる必要があると考えられる。

着用者一人一人にとって、心身共に心地よい衣服が提供されるためのインタラクティブなシステムの構築は、今後取り組むべき課題である。また衣服の調達方法が大きく変化する現代において、消費者としてどのように衣服選択をすべきか、教育機関とも連携をとりながら適切な衣生活教育が行われることが望ましい。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

1. Masuda Tomoe, Wada Minami, Murakami Kaori, Yokura Hiroko, Extraction of 3D Tight and Flared Skirt Curved Shapes by Relating Sensitivity Images and Physical Properties with 3D Curvature Values, Journal of Textile Engineering, 査読有, Vol.64, pp1-10, 2018
2. 増田智恵, 村上かおり, 3次元着装シミュレ

ーションによる被服デザイン教育用サイトを利用した衣服選択教材の試み,三重大学教育学部研究紀要,査読無,第69巻,pp133-143,2018

3. Kaori Murakami, Tomoe Masuda, The relationship between muscular activities and sensory tests when wearing jackets: Analyses by each activity of daily living, International Journal of Home Economics, 査読有, Vol.10, Issue.1, pp111-120, 2017
4. 下窪美咲, 村上かおり, 鈴木明子, 家庭科着装学習における自己表出の在り方の検討: 中学生及び高校生の被服関心とセルフ・モニタリングとの関係性, 日本家政学会誌, 査読有, 第67巻第5号, pp255-265, 2016
5. 村上かおり, 榎尾有加, 増田智恵, 川口順子, 女子大学生のファストファッションに対する消費行動, 日本衣服学会誌, 査読有, 第59巻第2号, pp61-68, 2016
6. 上田博之, 村上かおり, 増田智恵, 衣服-皮膚位置関係の動的解析に向けた一考察: 高輝度LEDマーカーの利用, 大阪信愛女学院短期大学紀要, 査読無, 第50巻, pp1-5, 2016
7. 村上かおり, 榎尾有加, 増田智恵, 川口順子, 女子大学生の環境配慮意識と衣生活における環境配慮行動の関係-環境配慮行動の要因連関モデルの検討による分析-, 日本衣服学会誌, 査読有, 第59巻第1号, pp21-32, 2015

[学会発表](計13件)

1. Kaori Murakami, Tomoe Masuda, A Study of Evaluations of Feelings of Comfort while Wearing Tight Skirts, The 19th Biennial International Congress (ARAHE), 2017, Tokyo, Japan
2. Tomoe Masuda, Kaori Murakami, Extraction of 3D Body Curved Surface Shape in Japanese Adult Females for the Sake of the 3D Draping and Design Garment Classification of the 3D surface Body Curved Surface Shape Features using the Angles of Concentrated Gaussian curvature and Concentrated Mean Curvature, The 19th Biennial International Congress (ARAHE), 2017, Tokyo, Japan
3. 増田智恵, 広範囲年齢層成人男女の衣服設計用3次元人体曲面形状の比較 点集中のガウスの曲率と平均曲率による相違性と類似性の特徴抽出, 日本繊維製品消費科学会, 2017年6月25日, 京都女子大学
4. 村上かおり, 世代差による衣服の柄の嗜好とイメージについて, 日本衣服学会, 2016年11月5日, 大妻女子大学
5. Kaori Murakami, Tomoe Masuda, Analysis of the gaps between body surfaces and

clothing while wearing clothes, IFHE World Congress XXIII, 1-5 August 2016, Daejeon Korea

6. Kaori Murakami, Tomoe Masuda, The relationship between muscular activities and sensory tests when wearing jackets: IFHE World Congress XXIII, 1-5 August 2016, Daejeon Korea
7. Tomoe Masuda, Kaori Murakami, Extraction of Adult Men's 3D-Body Image Derived from Men's and Women's Groups in Japan for Wear Selection Support Information, IFHE World Congress XXIII, 1-5 August 2016, Daejeon Korea
8. Tomoe Masuda, Kaori Murakami, Analysis of the Gaps between Body Surfaces and Clothing while Wearing Clothes, IFHE World Congress XXIII, 1-5 August 2016, Daejeon Korea
9. 増田智恵, 村上かおり, 広範囲年齢層成人女子の衣服設計用3次元人体曲面形状の把握 首を含む被覆人体体表曲面のガウスの曲率と平均曲率による特徴抽出, 日本繊維製品消費科学会, 2016年6月26日, 東京家政学院大学
10. 増田智恵, 大鹿友子, 村上かおり, エルダ層成人女子のためのデザイン服と衣服観に関する支援情報抽出, 日本家政学会第68回大会, 2016年5月28日, 金城学院大学
11. 團野哲也, 村上かおり, 1873年ウィーン万国博覧会における日本政府出品の繊維製品について -現兵庫県からの出品物と神戸外国人居留地-, 日本衣服学会第67回大会, 2015年11月14日, 神戸大学
12. 村上かおり, 鈴木明子, 家庭科における環境配慮意識の向上を目指した衣生活教材の開発, 日本家庭科教育学会第58回大会, 2015年6月27日, 鳴門教育大学
13. 下窪美咲, 村上かおり, 鈴木明子, 自己を見つめる家庭科着装学習の在り方に関する研究-中学生及び高校生の被服関心とセルフ・モニタリングとの関係-, 日本家政学会第67回大会, 2015年5月24日, いわて県民情報交流センターアイーナ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村上 かおり (MURAKAMI KAORI)  
広島大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 80229955

### (2) 研究分担者

増田 智恵 (MASUDA TOMOE)  
三重大学・教育学部・教授  
研究者番号: 60132437